

佐田介石をたずねて（続）

梅林 誠爾（哲学）

幕末から明治初期の文明開化の時代にあつて、近代文明を退けた佐田介石（1818—1882）という熊本出身の学僧に興味を引かれ、暇をみては調べようになつて二年経つ。本誌昨年号にそれまで調べたことを書いたが、今回は、その続きを記してみる。

それにしても、昔の人の足跡を再現するのは難しい。介石師はわずか百五十年ほど前に活躍した人である。記録や資料がないわけではない。しかし、記録が残されていても、それを読み解くための時間、労力、何よりも読み解く私の注意力が不足すると、人物像を結ぶことがかえつて難しくなるようだ。

『等象歳介石上人略伝』

介石師の伝記は、師入寂（明治十五年十二月九日）の翌年、門人仁藤巨寛が、『明教新誌』に三回に分けて書き、それを補充訂正して『等象歳介石上人略伝』（耕文社、明

治十六年四月、1883）として出版されている。浅野研眞著『明治初年の愛国僧 佐田介石』（東方書院、昭和九年、1934）、本庄栄治郎編著『佐田介石 社会経済論』（日本評論社、昭和一六年、1941）、荒木精之著『熊本県人物誌』（日本談義社、昭和三四年、1959）などどれも、耕文社『略伝』に拠っている。『略伝』冒頭の数行を引いてみよう。

等象斎は熊本県の人なり。文政五壬午歳 又文政元年戊寅に生るとも云ふ 肥後国八代郡鹿島邑 種山郷とも云ふ に生る。姓は廣瀬 即真宗派浄立寺也 父は慈博、母は佐伯氏なり。師、諱は介石断識と号す。壮歳の後、同国飽田郡小嶋町佐田氏 即真宗派正泉寺也 に養はる、によりて其姓を冒す。

『略伝』がすでに、生誕の年については文政五年（1822）と文政元年（1818）の間で揺れており、生誕の地についても八代郡鹿島村と種山村の間で揺れている。生誕年について、浅野研眞は、介石自身が明治七年（1874）の建白書の末尾に、「甲戌九月 白川縣肥後国飽田郡小嶋町 正泉寺 佐田介石 齢五十七歳」と記していることから、文政元年（1818）説が正しいと算定している。多くの介石研究者同様、私もこの算定に従う。

氷川

介石師が浄立寺に生れたこと、このことはすべての人が一致して述べている。ただ、その地については、「彼の生まれたのは、肥後国八代郡種山村の真宗本願寺派の一寺院浄立寺であった」（浅野、同前）という人もいれば、「肥後国八代郡鹿島村の浄立寺（浄土真宗本願寺派）住職・広志慈博の子として生まれた」（谷川穰『奇人』佐田介石の近代）『人文学報』87号、2002/12」という人もいる。

八代海に注ぐ川の中では、球磨川が大きい。他にも中小の河川が注いでいる。その中に氷川がある。一年ほど前の八代郡鹿島村（現在は、八代郡氷川町鹿島）の浄立寺を訪ねてみた。浄立寺は、平野部を流れる氷川の堤の近くに建っていた。浄立寺を守って来られた廣志家の方は、介石師の実家の系図を示して、色々と教えて下さった。その後、自動車を走らせて川を遡り、肥後の石工の故郷、八代郡種山村（現、八代市）に光林寺を訪ねた。氷川は、光林寺の前を過ぎて山間へと上っていた。浄立寺がかって光林寺の寺内にあつたこと、若い介石が修行した祠が近くにあること、光林寺も浄立寺も、西南戦争で川向こうに宿営した官軍によって焼き払われたことなどを教えていただいた。

西南戦争に際し浄立寺が消失し、移転・再建されたことは『八代郡史』（熊本県教育会八代郡支会、昭和二年、19

27）にも記されている。『竜北町史』（竜北村史編纂委員会編、昭和四八年、1973。平成の合併以前、鹿島は竜北町にあつた）には、明治十二年六月十日付けの、鹿島村への浄立寺の寺基移転の願書の一部が転載されている。それを引いてみると、

鹿島村の儀は寺院遠隔の地にて葬祭説教等不便利の訳を以て該村信徒より招請仕候間該字一同協議の上鹿島村新七十一番地に寺基移転仕り度……

明治十二年六月十日 鹿島村戸長 民門 清三

広志呑海 同大音 同真月

浄立寺と光林寺の方々からお教えいただいたことや、『八代郡史』『竜北町史』の記載内容から、介石生誕の地は、次のように推測できると思う。介石師は文政元年（1818）肥後国八代郡種山村の浄立寺に生まれたが、浄立寺は、明治十年（1877）の西南戦争の兵火により光林寺とともに消失し、明治十二年の夏、鹿島村（現在の八代郡氷川町鹿島）に移転・再建された。介石師は明治十五年に亡くなったが、鹿島の浄立寺は現在に至っている。

そうすると、鹿島説も種山村説も間違いとは言えない。細かく見れば、種山村とするのが適切であろう。しかし、大きく見れば、氷川地域の生まれということになる。鹿島の浄立寺と旧種山村の光林寺とは、少し離れている（車で約20分）が、鉄道も自動車道もなかった昔は、氷川がその

流域を一つの生活圈に強く結びつけていたはずだ。

『略伝』は師の父を「廣瀬慈博」としているが、『略伝』はこの点についても正確ではないようだ。浄立寺廣志家には、師の父母が廣志慈博、(佐伯氏) マチであることが伝わっている。先の寺基移転の願書にも、「広志呑海、同大音、同真月」とある。谷川稜も、先に引いたように「広志慈博の子として生まれた」としている。

平天平地不動ノ説

西洋天文学は、まずポルトガルやスペインの宣教師によつて、また江戸時代半ばには中国で訳述された漢文西洋天文書を通して、日本にもたらされた。しかし、江戸時代後期、18世紀末から19世紀の初め、日本の学者や通詞は、ニュートン、ケプラーの近代天文学をオランダ語版科学書から直接学び取り、日本語に訳述し広めるようになる。志筑忠雄『曆象新書』(1798—1802)、高橋至時『西洋人ラランデ曆書管見』(1803)等がそれである。

まさにそうした時、西洋の地動説や地球説に反対して、地は平で不動であり、動いているのは日月衆星だという東洋の伝統的天文説からの声が強まる。とりわけ世界の中心には須弥山と呼ばれる霊妙な高山があると説いてきた仏教にとつては、西洋近代天文学の普及は大きな危機であった

ろう。そこに仏教の大難を看取った普門律師円通は、須弥山説に基づく仏教天文学を『佛国曆象編』(文化七年、1810)にまとめ、からくり仕掛けの天文儀(須弥山儀、1818)を製作したと言われる。

『略伝』によれば、介石は、三十歳の頃、円通の高弟寰中禅師を京都嵯峨の天竜寺に訪ね、仏教天文学の教えを受け、また中国上古の天文説を自ら研究している。そのようにして「視実等象の理を發明」して、自らの天文説を『地球説略』(文久二年、1862)に著し、また維新後も『視実等象儀詳説』(明治十三年、1880)などの著述を通して、「平天平地不動ノ説」を説き、西洋の地動説のみならず地球説をも退ける論陣を張った。

日本における近代天文思想の形成の歴史を知るためには、西洋近代天文学を主体的に学び取ろうとした志筑忠雄、高橋至時、伊能忠敬などの並々ならぬ努力をまず踏まえなければならぬ。同時に、円通や介石による西洋近代天文学批判の運動も、近代天文思想形成史の忘れてはならない一面である。

視実等象儀と須弥山儀

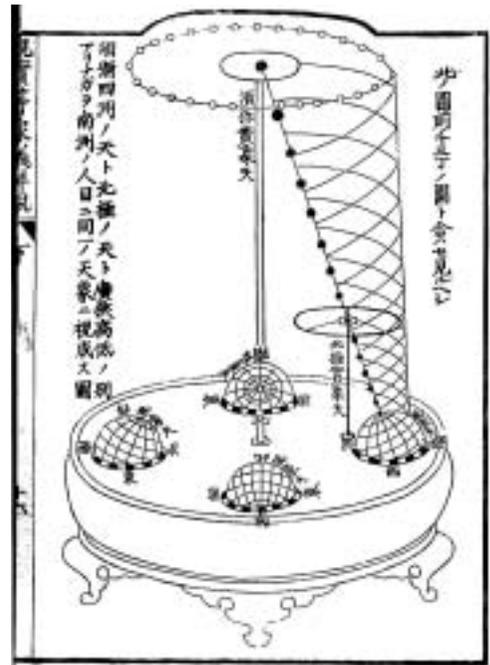
介石師も、その「平天平地不動」の説を「天下の人に授けんと欲して仏教天文器視実等象儀を製造」(『略伝』三

丁表) している。最初の製造は、師四十歳の頃である。ただし、「此器文久二壬戌(1862)年西京の騒乱の時灰燼となれり」とあるから、この天文儀は恐らく残っていない。明治九(1876)年、二度目の製造に取りかかる。『略伝』は、「筑後の田中久重をしてその機関を製造せしめ、肥後の松本喜三郎をして鐵圍山等を彫刻せしむ。師この時浅草臨濟宗桃林寺に寓せらる。此器明治十丁丑歳に成る。同夏これを内国勸業博覧会場に出品す」(七丁表) と記している。松本喜三郎は、生き人形で有名な松本喜三郎である。

熊本市小島の正泉寺には、師ゆかりの佐田家の方が、今も寺を守っておられる。正泉寺にも視実等象儀があつたが、市立熊本博物館に寄贈されたとのお話であつた。この秋、熊本博物館を訪ね、歴史をご担当の学芸員をお願いして、視実等象儀の撮影を許していただいた。視実等象儀は分解されて、一辺約六十センチの



【写真一】佐田介石視実等象儀(熊本市立熊本博物館所蔵)



【図一】視実等象儀正面図
(佐田介石『視実等象儀詳説』下巻十六丁表)

古い木箱の中に納まっていた。【写真一】はその土台部分を写したものである。これを組み立てれば、【図一】のようになる。他にも、浅草寺所蔵の視実等象儀が、上野の国立科学博物館に寄託されている。

奇しき縁と言うべきか、一步遅かったと言うべきか、介石の師の師、枳円通の須弥山儀(正確には、円通の考えをもとに、その弟子寰中が田中久重に依頼して一八五〇年に完成させたもの―竜谷大学図書館HPによる)も、実は熊本にあったのである。上通りの「時計の大橋」に円通の須弥山儀があるという情報を得て、店におじゃました。お忙しい中、社長自ら対応していただいた。初代社長夫人が、円通の須弥山儀を入手し保存されていたが、今は東京墨田

区のセイコー時計資料館に寄託されているとのことであった。大橋社長は、その須弥山儀の写真を大学の授業や研究に使うのであればと、快く譲って下さった。

【写真二】がそれである。

正泉寺や時計の大橋のご判断のように、介石の視実等象儀も円通の須弥山儀も、博物館などに託されてこそ、人の目にも触れ、保存も可能となる。ただ、わがままな話であるが、熊本辺りで両儀を並べて比較・展示していただければと願わずにはおられない。

写真や図からも、介石の視実等象儀は、円通の須弥山儀と違っていることが分かる。第一に、円通の須弥山儀の中央には、逆三角形の須弥山がそびえているが、介石の視実等象儀には須弥山が見えない。中央にあるのは、「須弥実象天」を支える軸棒であって、須弥山ではない。第二に、「日月衆星の軌道は、円通の須弥山儀では、少し幅のある円環で作られ、須弥山の中腹の高さの所にある。他方視実等



【写真二】 釈円通須弥山儀
(時計の大橋所有・セイコー時計資料館へ寄託)

象儀では、日月衆星の軌道は儀の最も高い所に位置し、「須弥実象天」に属している。第三に、介石の視実等象儀には、須弥実象天の他に、北極実象天とそれを支える軸があるが、円通のこの須弥山儀には北極が象られていない。(先日、墨田区向島のセイコー時計資料館を訪ね、円通須弥山儀の实物を拝見させていただき、北極がないことを確認できた。ただし、北斗七星が小さく象られていた。)

円通須弥山儀は、印度仏典『長阿含経』『阿毘達磨俱舍論』『立正阿毘曇論』の須弥山世界の記述に忠実である。それに対し、介石の視実等象儀は仏典から離れている。介石は、もちろん須弥山の存在を疑ってはいない。しかし、西洋近代天文学と競って、天文現象を説明するためには、凡人の眼には見えない(と言われる)須弥山を基準にするよりも、北極星ないし天の北極と北極下の地を結ぶ軸(【図一】では、二つの実象天の中心を通じて地に至る斜めの線。地動説の地球自転軸に対応)を基本的枠組として採用せざるを得なかったのである。そこに介石天地理説の問題と工夫があったと思われる(『熊本県立大学文学部紀要』第66号掲載の拙論「佐田介石仏教天文地理説の葛藤」参照)。

浅草寺

晩年の介石は、浅草との繋がりが深い。視実等象儀製造

の頃、「師……浅草臨濟宗桃林寺に寓せらる」と『略伝』は言う。また、『明教新誌』明治十三年二月十四日号には、「視実等象儀の発明を以て江湖に姓名を知られたる肥後の佐田介石翁は今度浅草伝法院唯我詔舜教正の附弟となり、同所新堀の天台宗東光院住職になられたり」という記事が見える。介石師は、晩年浅草に居を定めて全国を遊説し、天文地理から基督教批判、経済問題までを説いて回る。遊説先では、「悉皆師の説に帰嚮して国産を興し洋品を廢する社を開く」（『略伝』十一丁表）。長野には憂国社、大坂には保国社、東京には觀光社、京都には六益社等々と、開かれていったという。しかし、介石師は、越後高田での遊説の途中、明治十五年十二月九日、病に倒れる（享年六十五歳）。上越市直江津にある五智の国分寺で内葬の荼毘式が、翌年四月九日浅草寺において本葬が行われている。遺骨は浅草寺歴代墓地に葬られ、直江津の五智の国分寺、京都の知恩院、大坂の四天王寺そして熊本の正泉寺に分骨された。正泉寺の方は、最近、五智の国分寺、京都の知恩院の師の墓塔をお参りされたそうである。

五月に仙台で開かれた学会の帰りに東京で一泊し、浅草寺伝法院を訪ねた。浅草は関東大震災と東京大空襲の二度の大難に遭っている。師の墓塔や浅草寺内に建てられたという「佐田介石上人碑」は、無事だろうか。

伝法院では、浅草寺執事局録事妙徳院住職・峯岸勝師、

浅草寺庶務部・島田稔氏から、お話を聞くことができた。ご住職のお話では、介石師の墓石と浅草寺世代墓地は、戦前まで花屋敷の北側にあったが、空襲で境内一面が破壊され、師の墓塔も他の墓石とともに砕け散ってしまった。戦後、砕けた墓石は誰のものとも分らないまま、まとめて上野寛永寺に移した。他方、佐田介石上人碑は浅草寺内に残っている。ただし、一部が壊れ、また戦災や建物の移築などのため元の場所から移動している。浅草寺教化部において、大正大学、神奈川大学の大学院生、台東区等の協力を得て、「浅草寺金石文悉皆調査」を行い、『浅草寺の金石』を平成十五年に発行し、佐田介石上人碑についても収録している。ご住職は、そのように説明して、

『浅草寺の金石』の「佐田介石上人碑」の頁のコピーを下さった。

その後、許可をいただき伝法院の庭園



【写真三】佐田介石上人碑（浅草寺伝法院にて撮影）



【写真四】 介石師墓塔（熊本市・正泉寺）

に入り、佐田介石上人碑を撮影することができた。準備していたつもりでデジカメが一枚撮ったところで容量オーバーになったが、島田稔氏に助けていただいた。【写真三】は、その時のものである。「観光社」の文字が見える。

『浅草寺の金石』によれば、佐田介石上人碑の題額は増上寺住職福田行誠の書で、裏面銘文も完全ではないが高橋泥舟の筆である。石碑奉納者・造立者として、久邇宮、三条公、福田行誠「増上寺住職」、大相覚寶「天台座主」、平山省齋「元幕府外国奉行、維新後神道宗教家」、唯我詔舜「浅草寺住職」、岩下方平「元薩摩藩家老」、長岡護美「肥後藩主細川斉護の第五子」、釈雲照「高野山真言宗」、松浦詮「元平戸藩主」、本多正納「元駿河田中藩主」、浅田宗伯「宮内省侍医」、中村正直「明六社創立者の一人」など、維新时期

の著名な政治家、宗教思想家、啓蒙思想家が名を連ねている。それだけではない、日本橋の魚河岸中や柳橋の芸妓中から、浅草や深川、神田や本郷、千住や根岸の旦那衆にご内儀、金八や金七、なかやいと、さらには横網町邸の奥女中衆、横浜、埼玉、大垣、岐阜、栃木の人々まで、三百名ほどの名前が、にぎやかに刻まれている。門人も、熊本・萃生萃眼、信州・仁藤巨寛、大坂・森祐順など七名がある。介石師の思想運動の広がりが想われる。

【写真四】は、熊本市小島の正泉寺境内にある介石師墓塔である。墓誌には、「明治十五年十二月九日寂 等象齋釈介石」とある。

謝辞：介石師ゆかりの正泉寺様、浄立寺様、光林寺様はじめ、浅草寺の執事局録事妙徳院住職・峯岸勝師、庶務部・島田稔様、市立熊本博物館歴史担当学芸員石原健矩様、時計の大橋社長大橋善治様、セイコー時計資料館の近藤秀子様にも、厚く御礼申し上げます。